

その2. 住宅における友人との集い

岐阜女大家政 ○中野迪代 齊藤広子

【目的】居住者が、居住地に愛着を持ち、様々な形で良好な近隣づきあいをしていくことは、良い居住環境を培い、さらにその質を上げていくことを可能にする。とくに、大都市通勤圏の計画的戸建住宅地は、プライバシー意識の強い人々の寄合世帯的な要素を持つために、意図的に近隣づきあいを生み出す装置や仕掛けが必要であり、居住者の高齢化に伴って、その重要性は増加すると考える。本研究は、計画的戸建住宅地における居住地管理に資するために、夫と妻の近隣づきあいの実態と意識の差を明確にしようとするものである。本稿では、多様な近隣づきあいの場の一つとして、個人の住宅における友人との集いを取り上げ、夫と妻の意識と実態の相違点を明らかにする。

【方法】その1. に同じ。

【結果】①客に対する自宅の開放および閉鎖志向は、夫・妻に大差はない。夫・妻の1/3強が常に客の訪問を歓迎しており、永住意識が強い人ほどその傾向を示す。約3/4が自宅に友人を上げることが好んでおり（好き1/4、どちらかと言えば好き1/2）、13%が「特に親しくない友人でも自宅に上げると」答えている。②住宅を行き来したり、自宅に上げたりすることが、友人との親密感に影響を与えると考える者は、妻の方に多く、夫の1.5倍程度ある。③自宅を訪ねて来る人の種類や率に差があり、近所の友人や知人は、妻が夫の1.5倍と1.8倍ある。夫は職場の友人や知人の方が多い。④夫の場合は、妻より訪ねてくる人の率は低いが、その人達を自宅に上げる率は高い。⑤友人と集う場所は、妻は「友人宅」、夫は「自宅」が最多(M.A.)で、妻の「自宅」64%「友人宅」68%は、夫の1.7倍と2.7倍ある。⑥訪ねてきた友人と話す場所は、夫・妻とも「玄関」が最多であるが、次は、夫が「応接間」「和室」、妻が「食卓のある部屋」「応接間」などと差があった。